

「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方 ～身近な環境や自然に対して主体的に関わることのできる子どもの育成～

I. 主題設定の理由

地球温暖化や廃棄物、自然破壊などの様々な今日の環境問題を解決するためには、我々一人一人が環境と人間との関わりや自然など環境の価値についての認識を深めるとともに、環境問題を引き起こしている社会経済等の仕組みを理解し、環境に配慮した仕組みに社会を変革していく努力を行うことが必要である。

文部科学省では環境教育について「環境や環境問題に関心を持ち、人間活動と環境とのかかわりについての総合的な理解と認識の上に立って、環境保全に配慮した望ましいはたらきかけのできる技能や思考力、判断力を身につけよりよい環境の創造活動に主体的に参加し、環境へ責任ある行動がとれる態度を育成する。」ことと定義している。（文部省『環境教育指導資料』中学校・高等学校編 1991年、小学校編 1992年）小学校における環境教育では、子どもが身近な環境に意欲的にかかわり問題を見出し、考え判断し、よりよい環境作りや環境の保全に配慮した望ましい行動がとれる態度を育てることを目指す。生じている問題への「気づき」「知識」「問題解決への実行力」を育て、最終的には自分達のライフスタイルを見直す力量をもつことが期待されている。

環境教育や環境学習の機会を充実させ、環境や自然に対する豊かな感受性と熱意、見識をもつ「人づくり」をめざし本テーマを設定した。

II. 研究の具体的内容

1 環境教育に関わる学習会

身近な自然観察の方法を学ぶ「楽しい自然観察」

環境アドバイザー 伏見 勝さん

- ・校庭の木々や虫たちの観察の視点を学ぶ。

2 研究授業

資料を持ち寄っての理論研究 内容の検討 授業案検討 授業資料準備

1年 生活科「とびだせあそびたい あきといっしょ」

勝沼小学校 授業者 山宮 由紀 先生

- ・校庭で秋の物を探し、体全体で自然の良さを感じられるようにする。
- ・身近な自然のものに興味関心をもてるよう、自然の物をつかった「たからさがし」をする。

4年 学活「かかわりあい」

牧丘第二小学校 授業者 石原喜久夫 先生

- ・いくつかの対象について、二者関係から三者関係へと考えをつなげる。
- ・実際の社会では、三者より多くの要因が関係し合って、一つの結果がでていていることを知る。

3 一人一実践の報告

4 臨地研修

牧丘地区の自然観察

Ⅲ. 成果と課題

1 学習会

環境教育というと地球規模の問題に目がいきやすいが、子どもたちの身近な自然である校庭での自然観察を学習したことにより、自然が子どもの生活に密着していることを伝えやすくなった。また、子どもの目線で問題や課題を見いだす視点を持つことができた。いつも見慣れている校庭の草や木にもいろいろな秘密があり、自然のつながりを学ぶことができた。

2 研究授業

校庭の自然観察の実践では、子どもたちがネイチャーゲームをしながら、身近な自然にふれあうことができた。自然が好きという感覚を子どもたちに育てることが環境教育の大きな第一歩であり、その実践ができた授業であった。

身の回りの物事は複雑に絡み合っている一つの結果をもたらしていることを「かかわりあい」とし、簡単な例から考える実践もできた。身の回りの環境の良いも悪いも複雑な関わり合いの中から生まれていることを、子どもたちが考えるきっかけとなる授業になった。

3 実践報告

総合、道徳など様々な取り組みの紹介があり参考になった。お互いに実践発表をしたことで、いろいろな視点から環境問題について考えることができた。自分がやりたいテーマをを自分のこだわりの中で実践し紹介しあうことで、それらの実践の中から自ら取捨選択していくことができる。

今後、環境について学習したことを学校全体や家庭に生かしていけるようにできるとよい。また、環境に関する資料を持ち寄り、学校で掲示ができるようなものが作成できるとよい。

4 臨地研修

牧丘地区の自然観察をおこなった。普段は見られない川の中の生き物を観察した。自然を知ることが環境を知るきっかけになることを身をもって知る研修となった。環境教育を考えると、地球規模の環境問題を知識として知りながら、「自分にできること」を行動することが大切である。

(部長 檜垣貴子)